

# I 工業の街大阪の都市化変遷図の作成 —社会労働運動の背景として—

大谷 渡・相良 真理子

## 1

大阪は明治維新以降の産業革命によって近代工業都市として形成され、拡大膨張を続けて巨大都市となった。『大阪の近代—大都市の息づかい』（大谷渡編著、2014年、東方出版刊）は、日本が本格的な資本主義形成期に入った1890年代から、戦後復興期を経て高度成長が始まった1960年代初めまでを対象として、都市の姿の変遷を「形」と「心」の両面から具体的に跡付け、巨大都市大阪の今日の姿の意味を考える1つの手立てとしたものである。

ここに言う「形」とは、大阪の街の姿の変化であり、「心」とは人びとの暮らしの中の幸福や悲しみ、希望などを指している。同書の序章「20世紀の息吹の中で」は、工業の街に変貌した大阪に登場した2人の近代女性の活躍と街の変化を取り上げた。2人の近代女性とは、大阪初の女性記者で後の大逆事件の犠牲となった管野スガと、南河内の大地主の娘で『明星』を代表する5人の女性歌人の1人石上露子（本名・杉山孝）である。2人は近代思想に目覚め、産業革命の進行、達成期の社会矛盾に目を向け、女性・労働者・小作人の解放を主張した<sup>1)</sup>。

同書第1章「悲しみと希望」では、日清戦争前後における工場の設立状況と生産の実態、貿易の問題点、工場の火災、職工の募集と争奪、機械の導入と技

術水準などに目を向け、「東洋のマンチェスター」と呼ばれた工業都市大阪の基盤形成期の現実を記述した。そして第2章において、工業化による大阪の街の環境悪化について、『大阪時事新報』に見る明治後期の衛生環境」として叙述した<sup>2)</sup>。

大阪の産業革命進行期を考察した「悲しみと希望」では、「工業の街、職工の街」の小見出しによる記述の中で、1892年（明治25）・1896年（明治29）・1902年（明治35）における工場の分布状況と職工分布状況を示した図を掲げた。1892年の図は、大阪市と東成・西成両郡及び住吉郡における分布状況、1896年と1902年は大阪市及び東成・西成両郡における分布状況である<sup>3)</sup>。

1892年と1896年の工場及び職工数とその所在地は、『大阪府諸会社及び銀行表』（大阪府内務部第2課、1893年3月）と同（大阪府内務部第5課、1897年5月）からデータを抽出し、1902年は『工場通覧（明治三十五年）』（農商務省商工局工務課、1904年3月）から工場及び職工数とその所在地データを収集した。収集したデータは、十分な分析と検討を加えて完全な表を作成した上で、2CGにより図を作成した。

本稿では、日露戦争後すなわち産業革命達成後の1907年（明治40）における「大阪市及び東成・西成両郡における工場分布状況」（図I-1）と「大阪市及び東成・西成両郡における職工分布状況」（図I-2）を作成して掲げた<sup>4)</sup>。

## 2

図I-1と図I-2は、『工場通覧（明治四十年）』（農商務省商工局工務課、1909年5月）からデータを抽出し、分析と検討を加えて2CGで作成した。工場と職工数は町ごとに集計し、地図は「大日本帝国測量部」作成の2万分の1の地形図（1909年）をもとにし、『大阪市街全図』（1913年）などを参考にして作成した。

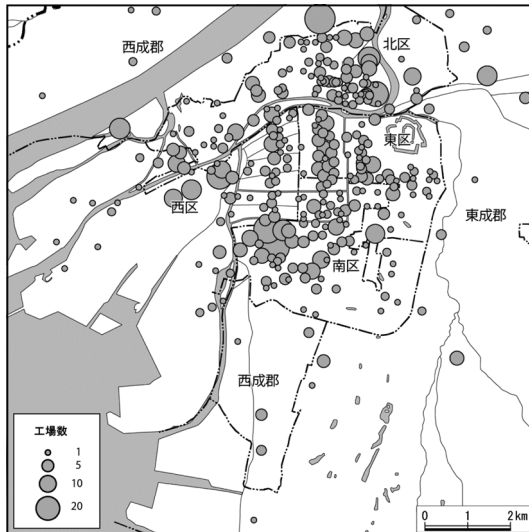
これをみると、日露戦後の1907年（明治40）には、大阪市域に工場と職工が  
(2)

I 工業の街大阪の都市化変遷図の作成（大谷・相良）

溢れんばかりになっていた様子がわかる。1907年における大阪市及び東成・西成両郡の工場数は996、うち市域が884である。1902年の工場数が524であったから、5年間に倍増したことがわかる。1907年の職工数は6万5316人、うち市域が5万1879人である。

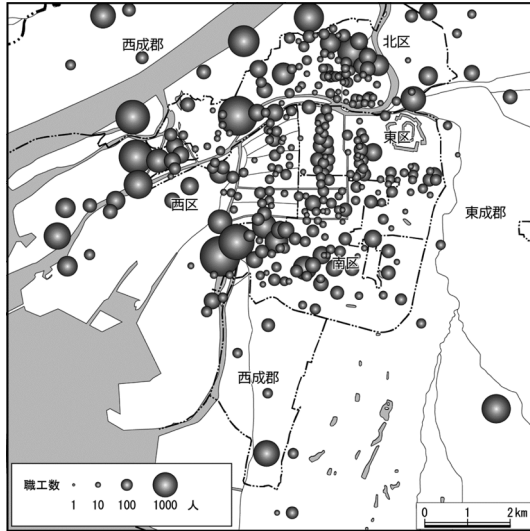
大川・堂島川・安治川の北側から新淀川までの地域には、日本紡績（職工数2721人）や大阪合同紡績天満工場（1200人）などがあり、木津川畔には、大阪紡績本社工場（4286人）や摂津紡績木津川工場（2720人）など大規模工場があった。

船場地域には、大阪活版製造所（北久太郎町2丁目）や大阪毎日新聞社（大



(注)「大日本帝国陸地測量部」の『2万分の1地形図』(1909年)をもとにし、『実地踏測大阪市街全図』(1906年)、『大阪市街全図』(1913年)などを参考にして作図した。工場数は、『工場通覧(明治四十年)』(農商務省商工局工務課、1909年5月)に掲載された大阪市及び東成・西成両郡の工場を町ごとに集計し、作成した。

図 I-1 1907年の大阪市及び東成・西成両郡における工場分布状況



(注)「大日本帝国陸地測量部」の『2万分の1地形図』(1909年)をもとにし、『実地踏測大阪市街全図』(1906年)、『大阪市街全図』(1913年)などを参考にして作図した。職工数は、『工場通覧(明治四十年)』(農商務省商工局工務課、1909年5月)に掲載された大阪市及び東成・西成両郡の職工数を町ごとに集計し、作成した。

図I-2 1907年の大阪市及び東成・西成両郡における職工分布状況

川町)のように100人を超える職工が働く工場もあったが、半数以上は職工数20人以下の小さな工場であった。薬品・ガラス・人力車・メリヤス・ブラシ・食品・洋服など、さまざまな製造工場があった。

なお、図I-1の工場数は円の面積で表し、職工数は球の体積で表している。職工数は膨大であるため、円で表示すると地図に入りきれないので球体で表している。ちなみに、築港は1897年(明治30)に起工され、1903年(明治36)に大栈橋が完成している。海岸線や河川など、地図情報の精密を期すべきところは、1909年の「大日本帝国陸地測量部」の地形図によった。

ところで、明治末の『大阪朝日新聞』(1912年5月3日付)には、「煙突と電

車」に象徴される大阪市の工業発展と都市化の様相を綴った記事が掲載されている。この記事は、『大阪河内の近代』（大谷渡著、2002年、東方出版刊）において、「近郊農村の変貌」として次のように引用している。

同記事は、「試みに天王寺烏ヶ辻に立ちて辺を四顧せよ」「昨日迄の雑木林は今日は二層三層の赤煉瓦造りとなり」「水田は化して洒洒たる別荘」となると述べ、「独り天王寺に限らず、東も西も北も皆同じ勢力が一様の傾向を以て田畑即ち百姓を侵略しつゝある標象に外ならぬ」と記していた。さらに同記事は、大阪市内の農地の激減状況について述べたうえで、「こゝ数年後には市内に一の田地を見ざるは勿論、五十年、百年以後には大阪府下全体が煙突となり電車とならぬとは誰れか断言し得るものぞ」と書いていた。

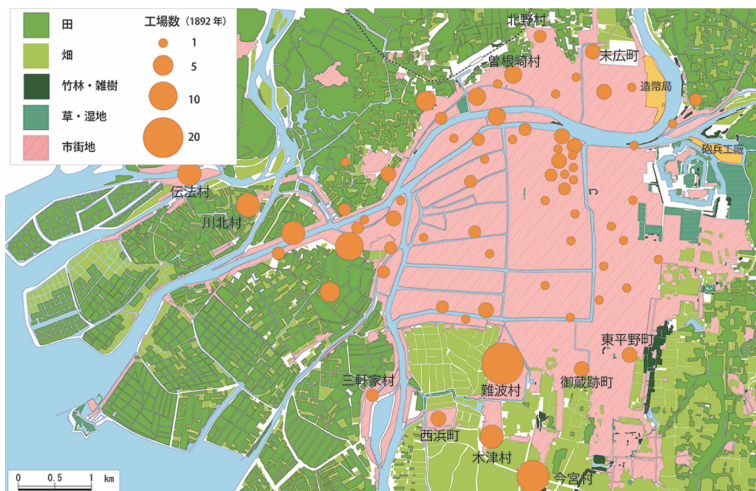
大正期になると、日本経済の急激な成長にともない、大阪市は工業都市としていっそう目覚ましい発展を遂げ、1925年（大正14）には、東成郡と西成郡全域の44か町村が大阪市の編入され、市域の大拡張が行われた。

### 3

図I-3は、1880年代後半における市街地、及び田・畑・雑木林・草地などの地域を表し、合わせて1892年（明治25）の工場分布状況を示したものである。ピンクで示した市街地は、商店・住宅・工場・公共施設・軍用施設・寺社などが建ち並んでいる街区であり、墓地なども含んでいる。

作図には、「大日本帝国陸地測量部」の『2万分の1地形図』（1885年）と『大阪実測図』（地理局図籍課、1886年）を用い、2CGによって作成した。『大阪実測図』は、1886年（明治19）測量、1888年（明治21）発行であり、田・畑・竹林・雑樹・荒地・湿地などが詳細に描かれている。

工場の分布は、『大阪の近代一大都市の息づかい』に掲載した「1892年の大阪市と東成・西成両郡及び住吉郡における工場分布状況」の図を用い、これを市街地や田畑、雑木林などを示した図に載せる形で作成した。これをみると、



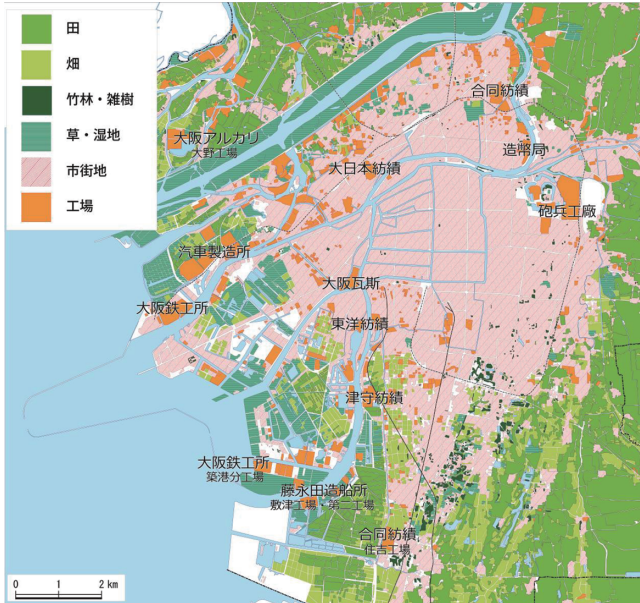
(注)作図には、『2万分の1地形図』（大日本帝国陸地測量部、1885年）と『大阪実測図』（地理局図籍課、1886年）を用いた。「市街地」は、商店・住宅・工場・軍用施設・公共施設・寺社などが立ち並ぶ街区であり、墓地なども含まれている。工場の分布は、『大阪の近代一大都市の息づかい』（大谷渡編著、2014年、東方出版刊）に掲載した「1892年の大阪市と東成・西成両郡及び住吉郡における工場分布状況」図を用いた。

図 I-3 1885～92年の大阪市街地と田畑・草地等、及び工場分布状況

難波村や今宮村などに工場が集中している様子とともに、船場地域や大阪城南西部、天満などに工場ができていたことがわかる。そして、市街地の北と西には田が、南と東には畑が広がっていたことがわかる<sup>5)</sup>。

図 I-4 は、1925年（大正14）の大阪地域拡張直後の様子を示したものである。市街地部分には、軍用地や公共施設、寺社や墓地、資材置き場なども含めた。作図には、「陸地測量部」の『3千分の1地形図』（1926年）と、『大大阪市街全図』（1926年）、『大大阪市名勝パノラマ地図』（1925年）、『最新実測大大阪明細地図—大大阪地域拡大記念付録』（1925年）、『大大阪地図—都市計画及接続町村編入略図』（1924年）などを用い、これらの地図を比較検討して市街地と主な工場地、及び田・畑・草地・雑樹などの場所を特定した。

I 工業の街大阪の都市化変遷図の作成 (大谷・相良)



(注) 作図には、『3千分の1地形図』(陸地測量部、1926年)と『大大阪市街全図』(日下和楽路屋、1926年)、『大大阪市名勝パノラマ地図』(金尾文測堂、1925年)、『最新実測大大阪明細地図—大大阪地域拡大記念付録』(大阪毎日新聞社、1925年)、『大大阪地図—都市計画及接続町村編入略図』(大阪朝報、1924年)を用いた。「市街地」は、商店・住宅・工場・軍用施設・公共施設・寺社などが立ち並ぶ街区であり、墓地や資材置き場なども含めている。主な工場地は、オレンジ色で示した。特に大きな工場については名称を付した。

図I-4 大正末における大阪市の市街地・田畑・草地・工場地等

「陸地測量部」の3千分の1地形図では、畑と空地が白で表示されていて区別がつかないので、『大大阪市街全図』や『大大阪市名勝パノラマ地図』『最新実測大大阪明細地図』『大大阪地図』などの絵地図と照合検討して表示した。

鉄道路線は、代表的なものだけにして市電は省いた。主な工場はオレンジ色で示した。特に大きな工場については名称を付した。図の範囲は、東を大今里近辺までとしたが、現在の東大阪市高井田付近まで作成した。大今里以東には、水田が広がっていた。

図 I-3 と図 I-4 をみると、約30年の間に田畑が壊滅し市街地が大きく広がったことが一目でわかる。西道頓堀川の南側一帯の畑地や大阪城の南側、大阪駅の北側などはすべて市街地に変っている。明治前期に田畑であった海沿いの一帯には大規模工場が立ち並び、耕地の大部分が草地や湿地に変わっていることもわかる。

1925年（大正14）における大阪市域の大拡張時、すなわち東成郡と西成郡全域の編入時には、両郡に7000町歩の耕地が存在した。この耕地は、その後の工業地や商業地の拡大によって、1940年（昭和15）には5分の1の1400町歩に減少している<sup>6)</sup>。本稿に掲げた図 I-4 に続く昭和前期の状況を示す図も作成しているが、ここでは割愛し別稿で発表することにした。

なお、『大阪の近代一大都市の息づかい』（大谷渡編著、2014年、東方出版刊）は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「大阪都市遺産の史的検証と継承・発展・発信を目指す総合的研究拠点の形成」の成果として刊行したものであり、本稿は「大阪社会労働運動と政治経済研究班」の研究成果であるとともに、前記の戦略的研究基盤形成支援事業の成果でもある。

## 注記

- 1) 同書序章の管野スガと石上露子については、『管野スガと石上露子』（大谷渡著、1989年、東方出版刊）と『石上露子全集』（大谷渡編、1998年、東方出版刊）をもとに、その後の研究成果を加えて執筆したものであり、2人について詳しくは、前2著を参照されたい。
- 2) 第1章「悲しみと希望」は大谷執筆、第2章「『大阪時事新報』に見る明治後期の衛生環境」は相良執筆である。
- 3) 住吉郡は1896年（明治29）に東成郡に合併した。なお、1897年（明治30）4月に東成・西成両郡のうち、13か町村全域と15か村の一部が大阪市に編入された。
- 4) 図の工場数と職工数は、民間の工場について示したものであり、大阪砲兵工廠と造幣局は含まれていない。大阪砲兵工廠の各年の「職工人員」は、『陸軍統計年報』に「一ヶ年職工延人員」として記されている。造幣局については、『造幣局百年史 資料編』（1974年）に、「年度末現在職員数変遷表」が掲載されている。ただし、これらの資料の統計数字では、各年の正確な「職工」数は把握できない。
- 5) 『新修大阪市史』第10巻には、「歴史地図」として「明治前期の大阪—市制施行前—」の



## I 工業の街大阪の都市化変遷図の作成（大谷・相良）

図が掲げられていて、その②に「現市内の土地利用と行政界」の図が掲載されている。同図によっても、市街地や耕地の分布状況を見て取ることができるものの、同図は大阪の工業地化と都市化の変遷を視覚化することを目的として作成されたものではなく、本稿において示した2CGによる作図とは意図するところが異なるものである。

6) 『大阪河内の近代』（大谷渡著、2002年、東方出版刊）。